

山の雑誌「アルプ」

私の山の記憶は概ねこの雑誌と重なっている。当時の山の雑誌といえば、今と同じく「岳人」と「山溪」が主流で、この雑誌は発行部数も少なく、田舎の本屋では入手しにくかった。また、ハードな登山をやっていた若者には、内容もどことなくジジ臭くて馴染みにくい面があったかも知れない。

しかし、前二者の雑誌が専ら実用記事中心であったのに比べて、この「アルプ」はたった50頁ほどの小冊子ではあったが、どことなく洗練されていて、内容も紀行文や随想や論評など新鮮な感じを与えたものであった。絵画や版画、写真なども掲載されていて芸術的な趣もあった。

創刊は1958年。私が読み始めたのは第40号くらいからであるが、試みに創刊号を揃えてみると、尾崎喜八、黒田初子、石川欣一、朝比奈菊雄、深田久弥、山口耀久、串田孫一、鳥見迅彦などの詩文、大谷一良、曾宮一念、内田耕作、白川義員などの版画、絵画、写真が載っている。

“アルプ”とは高山にある草原状の土地の意味で、なるほど随想や紀行文にはハードなクライミングを題材にしたものもあるが、これを“アルプ”というオブラートに包んで表現しているところがニクイ。この雑誌の性格について、編集者達は以下のように記している（「編集室から」）。

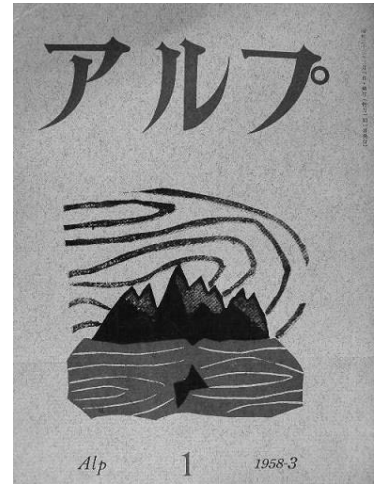
「ここに創刊された「アルプ」の性格については、私どもは何も宣言しない。ただ、雪線近いその草原が、人の住む町の賑わいから遠く静まっているように、「アルプ」もいわゆる雑誌の華やかさや、それに伴う種類の刺激性などからは距ったものだとは言えるし、自から願っている方向も決まっている。また、芸術として、燃焼し結晶し歌となる場所でもあると思う。従って高原逍遙のみに満足する趣味を悦んでいるものでもない（串田孫一）」。

この雑誌は、役割を終ったとして確か300号くらいで廃刊になったと記憶しているが、私の本棚にあるのは224号が最後である。度重なる引越しで定期購読が途切れてしまったのであろう。

特に218号（1976年4月号）は、亡くなった辻まこと特集で興味深い。廃刊後永年を経た現在でも、「アルプ展」が催されているのは、まだまだ「アルプ」ファンが健在な証であろうか。

創文社発行

（2005年12月記）



（創刊号）